

原 著

## 回復期リハビリテーションにおける 動機づけ向上のための映像の開発

小野健一\*<sup>1</sup> 小池康弘\*<sup>2</sup> 大岸太一\*<sup>1</sup>

### 要 約

回復期リハビリテーションにおいて、患者の積極的なリハビリテーションへの参加が重要であり、そのためにはリハビリテーションへと向かう動機づけを促す必要がある。本研究の目的は、回復期リハビリテーションにおける患者の肯定的結果予期に着目して、動機づけを向上させるための映像を開発し、その妥当性を検討することであった。対象は回復期リハビリテーションでの職務経験豊富な理学療法士、作業療法士、言語聴覚士10名であった。研究者間でブレインストーミングを行いながら作成した映像の絵コンテを作成し、肯定的結果予期に影響を与えるであろう内容が絵コンテ内に含まれているかどうかをコンセンサスメソッドのデルファイ法を用いて検討した。検討を繰り返した結果、仮定した全ての内容で対象者の同意が得られ、回復期リハビリテーションにおける患者の動機づけ向上のための映像が作成された。本研究で作成した映像は高い妥当性を有し、リハビリテーション場面で簡便にかつ有効に活用できるものである。本映像を使用することで患者の積極的なリハビリテーション参加を促すことが可能となり、リハビリテーションの帰結に良い影響をもたらすものとなると考える。

### 1. 緒言

回復期リハビリテーション病棟協会では回復期リハビリテーション（以下、回リハ）病棟は「脳血管疾患または大腿骨頸部骨折などの病気で急性期を脱しても、まだ医学的・社会的・心理的なサポートが必要な患者さんに対して、多くの専門職がチームを組んで集中的なリハビリテーションを実施し、心身ともに回復した状態で自宅や社会へ戻っていただくことを目的とした病棟」とされている<sup>1)</sup>。回リハにおいては、在宅復帰率の向上、日常生活動作（Activities of Daily Living：ADL）能力の向上が求められており、令和2年の診療報酬改定では重症者の日常生活機能の改善度や入院日数と機能的自立度評価（Functional Independence Measure：FIM）で計算される実績指数の基準が引き上げられるなど、治療のアウトカムにも重点が置かれるようになって<sup>2)</sup>。

リハビリテーション（以下、リハ）分野においては、

リハに取り組む動機づけが重要となる。動機づけは人間の行動を説明する社会科学領域における概念であり、人間の行動の背景には動機づけが存在するとされている<sup>3)</sup>。リハ分野における動機づけの先行研究では動機づけがリハ帰結の重要な要因となり得ること<sup>4)</sup>、動機づけがリハへのアドヒアランスに関わること<sup>5)</sup>、動機づけの低下は積極的なリハ介入を困難とさせることなどが示されており<sup>6)</sup>、動機づけを適切に捉えることや動機づけを向上させる関わりを模索することはリハビリテーション療法士においても重要な行動の一つであると言える。そこで我々はBanduraらが社会的学習理論の中で提唱した結果予期<sup>7)</sup>に着目した。結果予期とはある行動がどのような結果につながるかの予測であり、肯定的な結果予期は行動を促進することが知られている<sup>7)</sup>。これをリハ分野に置き換えてみると、リハを行うことによって身体機能やADL、生活の質が向上することを患者が予測することで、積極的なリハへとつなが

\*1 川崎医療福祉大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

\*2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科 作業療法専攻

（連絡先）小野健一 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : k-ono@mw.kawasaki-m.ac.jp

ると推察できる。我々は、リハにおける患者の肯定的結果予期に影響を与える要因について検討し、リハビリテーション療法士を対象にした質的研究の結果、肯定的結果予期に影響を与える要因には「心身機能・活動・参加を向上させるリハの時間」、「病棟生活で習慣づけるべき行動とその効果」、「周囲からの働きかけと環境設定がもたらす効果」、「回りハ生活の動機づけを高める感情や思考」、「機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス」の5つのカテゴリーが存在することを明らかにした<sup>8)</sup>。しかしながら、これらの内容を画一的に患者に伝え、動機づけ向上へとつなげるための方法論については未検討である。医療現場では患者教育の手法に映像やパンフレットが用いられており、その有効性が報告されている<sup>9,10)</sup>。パンフレットや映像は診療時間や診療報酬に左右されず、反復的な患者独自の学習を促すツールとして期待されている。このようなパンフレット、映像を用いた患者独自の学習で、リハに対する動機づけを向上することが可能となれば、診療時間に限りのある回りハの現場における訓練の効率化につながり、回りハにおけるADLの向上、在宅復帰への支援の一助となるのではないかと考える。

本研究の目的は、回りハにおける患者の動機づけを向上させるための映像を肯定的結果予期の観点から作成し、その妥当性を検討することであった。本研究により、回りハの訓練動機づけを向上させるプログラムが完成することで、ADLの向上や在宅復帰率、ひいては患者がその人らしく地域で生活することの一助となると考える。また、プログラムを映像で作成することにより、場所や実施者に依存することなく、画一的な介入が可能になることも本研究の意義であると考えている。

## 2. 方法

### 2.1 研究手法

本研究はコンセンサスメソッドにおけるデルファイ法<sup>11)</sup>を用いた質的研究であった。

### 2.2 対象者

コンセンサスメソッドの対象者は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の国家資格を持ち、回りハ病棟での職務経験を有する者10名とした。回りハに従事した経験が豊富で、患者の動機づけについて熟知していることを選定基準とした。コンセンサスメソッドのサンプリング数に関する基準は明確に示されていないが、回答の偏りを考慮し、10名を対象者として選定した。

### 2.3 映像の作成

まず、映像制作の基となる絵コンテの作成を行っ

た。絵コンテとは映像コンテンツの設計図にあたるものであり、映像の一場面一場面を絵と文章で表現したものである。映像コンテンツの作成の際には、まず絵コンテで映像全体の流れを共有し、細かな修正を繰り返した上で、本映像を作成するという過程を経る。本研究の絵コンテの一部を図1に示す。絵コンテの内容には先に発表した回りハにおける患者の肯定的結果予期に影響を与える要因<sup>8)</sup>の中カテゴリーにあたる「リハで動作練習を行うと生活の自立度が向上する」、「リハを行うと身体機能が向上する」、「社会参加を促進する要因」、「訓練に伴う行動変容」、「離床を習慣づけることでもたらされるメリット」、「自主トレーニングを行うことでもたらされるメリット」、「リハ以外の時間も積極的に活動することが重要」、「麻痺手使用の習慣化が機能回復を促す」、「モチベーションを向上させるための周囲からの働きかけ」、「生活の質を改善させる環境設定」、「他者に迷惑をかけないために必要な目標」、「本人が持つ強い気持ち」、「機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス」の13個の内容が反映されるようにした。映像の作成はCrevo株式会社に協力を依頼し、絵コンテの内容は筆頭著者、共著者、映像作成の専門家と吟味しながら作成を進めた。肯定的結果予期に影響を与える要因が全て絵コンテ内で表現されるよう留意し、ブレインストーミングを行いながら内容を決定し、絵コンテを作成した。

### 2.4 内容的妥当性の検討

完成した絵コンテの内容的妥当性をコンセンサスメソッドにおけるデルファイ法を用いて検討した。内容的妥当性とは尺度項目の内容が真に測定したい内容を正しく測定できているかを表す概念であり<sup>11)</sup>、主に心理尺度作成で検討される概念である。本研究では肯定的結果予期に影響を与える要因に関する内容が絵コンテ内に含まれており、正しく視聴者に伝わるかどうかを検討した。また、デルファイ法とは内容的妥当性を検討する手法の一つであり、対象者に対して同意の程度をリッカート尺度にて評価してもらう方法である<sup>11)</sup>。コンセンサスメソッドは専門家間で異なる意見を集約したり、合意形成で決着をつけるための手法であるとされている<sup>11)</sup>。本研究においては、同じ場面を見てもそれが同一概念を表現できており視聴者に伝わりと捉えるかどうかは専門家間で意見が異なることが予測された。そのため、意見の一致率を数値として捉えることのできるコンセンサスメソッドの手法を選択した。また、デルファイ法のメリットとして対象者を1カ所に招集する必要がない点が挙げられる<sup>11)</sup>。これにより、異なる職種や職場の者を対象者にしてもスムーズか





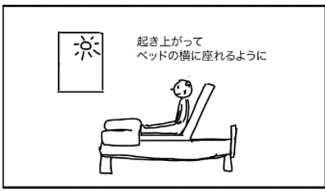


カットID	ラフコンテ	アクション・カメラワーク	ナレーション原稿	タイムコード
1	 <p>回復期リハビリテーション病棟にご入院中の皆様</p>	画面中央，高齢の男女二人（70代），【回復期リハビリテーション病棟にご入院中の皆様】	回復期リハビリテーション病棟にご入院中の皆様。	5.00
2	 <p>回復期リハビリテーション病棟はリハビリテーションを行う病棟です</p>	リハビリテーション風景左側，平行棒でゆっくり歩く高齢男性患者と理学療法士。中央，4点歩行器で歩く患者と理学療法士。右，ストレッチをしている患者と理学療法士。（シーン1，3以降とは別の患者の方々）	回復期リハビリテーション病棟はリハビリテーションを行う病棟です。	6.00
3	 <p>積極的にリハビリテーションに取り組んであなたらしい生活を取り戻していきましょう</p>	その横に療法士が寄り添う。【積極的にリハビリテーションに取り組んで，あなたらしい生活を取り戻していきましょう】	積極的にリハビリテーションに取り組んで，あなたらしい生活を取り戻していきましょう。	7.00
4	 <p>まずは，朝になったらベッドから起きあがるようにしてみましょう</p>	設定は病院の病室。リクライニングの介護ベッドに寝ている，シーン1の高齢男性。窓に太陽が昇ってくると，男性のリクライニングベッドが起き上がり，目を開ける。その上にテキスト【まずは，朝になったら，ベッドから起きあがるようにしてみましょう】	まずは，朝になったら，ベッドから起きあがるようにしてみましょう。	5.00
5	 <p>起き上がってベッドの横に座れるように</p>	長座の姿勢で座る男性。その上にテキスト【起き上がって，寝床の上に座れるように】ゆっくり横向きになって。	起き上がって，ベッドの横に座れるように。	4.00
6	 <p>日中ベッドの横に座っているそれだけでも体力はついでいきます</p>	長座の姿勢から，ベッドの下に足を下ろし，座る男性。その上にテキスト【日中ベッドの横に座っているそれだけでも体力は上がっていきます】	日中ベッドの横に座っている，それだけでも体力はついでいきます。	5.00
7	 <p>体力がつけば動くことが少しずつできるようになります</p>	左手をちょっと上げて動かしてみる男性。（右側に麻痺があります。その上にテキスト【体力がつけば，動くことが少しずつできるようになります】	体力がつけば，動くことが少しずつできるようになります。	5.00

図1 作成した絵コンテの一部

表1 内容的妥当性検討のアンケート内容

検討項目	○	△	×	コメント	内容が入っていると思うカットID
心身機能・活動・参加を向上させるリハの時間	リハビリで動作練習を行うと生活の自立度が向上する				
	リハビリを行うと身体機能が向上する				
	社会参加を促進する要因				
	訓練に伴う行動変容				
病棟生活で習慣づけるべき行動とその効果	離床を習慣づけることでもたらされるメリット				
	自主トレーニングを行うことでもたらされるメリット				
	リハ以外の時間も積極的に活動することが重要				
	麻痺手使用の習慣化が機能回復を促す				
周囲からの働きかけと環境設定がもたらす効果	モチベーションを向上させるための周囲からの働きかけ				
	生活の質を改善させる環境設定				
回りハ生活の動機づけを高める感情や思考	他者に迷惑をかけないために必要な目標				
	本人が持つ強い気持ち				
機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス	機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス				

つ客観的な検討が可能になると判断した。

内容的妥当性のアンケートの内容を表1に示す。本研究では、肯定的結果予期に関連する要因<sup>8)</sup>のうち、大カテゴリーおよび中カテゴリーの内容が映像内で表現されているかを「○：適している」、「△：修正が必要」、「×：適していない」の3件法で回答し、「△」、「×」と回答した場合はその理由を記載するよう依頼した。10名の対象者の内、9名以上の「○」への回答（同意率90%以上）をもって映像内に内容が適切に表現されていると判断し、同意率90%に満たなかった内容に関しては絵コンテを修正し、複数回繰り返して検討を行った。内容的妥当性の検討後、映像の制作を行い、映像の内容に関しても筆頭著者、共著者、映像制作の専門家で吟味しながら最終的な映像を作成した。

### 3. 結果

#### 3.1 対象者の属性

対象は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の国家資格を持ち、回復期リハビリテーション病棟での職務経験を有する者10名であった。職種の内訳は理学療法士3名、作業療法士5名、言語聴覚士2名で平均年齢は34.0±2.4歳、平均経験年数は12.2±2.0年であった。所属施設の内訳としては、現在回りハを有する病院で勤務しているもの8名、回りハ病棟で十分な職務経験を有する大学所属の研究者2名であった。

#### 3.2 内容的妥当性の検討

内容的妥当性の検討の結果を表2に示す。検討は合計3回行った。1回目のアンケートでは13個の内容のうち、「離床を習慣づけることでもたらされるメリット」、「自主トレーニングを行うことでもたらさ

れるメリット」、「リハ以外の時間も積極的に活動することが重要」、「麻痺手使用の習慣化が機能回復を促す」、「生活の質を改善させる環境設定」の5つの内容で同意率90%以上を達成した。その他の内容には絵コンテ内にその内容が反映されていないことや内容が専門的であり伝わりにくいこと、用語の捉え方が異なる点などについてのコメントが見られた。回答されたコメントを参考にして絵コンテの修正を行い、採用された5つの内容を除いた8つの内容で再度内容的妥当性のアンケートを実施した。

2回目のアンケートでは8つの内容のうち、「リハを行うと身体機能が向上する」、「訓練に伴う行動変容」、「モチベーションを向上させるための周囲からの働きかけ」、「本人が持つ強い気持ち」、「機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス」の5つの内容で同意率90%以上を達成した。その他の内容には絵コンテ内にその内容が反映されていないことや文言の修正、より伝わりやすい表現に変更した方が良いなどのコメントが見られた。達成されなかった内容に関しては回答されたコメントを参考にして絵コンテの修正を行い、採用された5つの内容を除いた3つの内容で再度内容的妥当性のアンケートを実施した。

3回目のアンケートでは3項目中、「リハで動作練習を行うと生活の自立度が向上する」、「社会参加を促進する要因」、「他者に迷惑をかけないために必要な目標」の3つの内容全てで同意率90%以上を達成した。

完成した絵コンテを基に映像を作成し、最終的に約3分の回りハにおける動機づけ向上のための映像が完成した（図2）。

表2 内容的妥当性の検討の結果

大カテゴリー	中カテゴリー	1回目 (回答率100%)	2回目 (回答率100%)	3回目 (回答率100%)
心身機能・活動・参加を向上させるリハの時間	リハビリで動作練習を行うと生活の自立度が向上する	70%	80%	100%
	リハビリを行うと身体機能が向上する	80%	100%	
	社会参加を促進する要因	40%	50%	100%
	訓練に伴う行動変容	40%	90%	
病棟生活で習慣づけるべき行動とその効果	離床を習慣づけることでもたらされるメリット	90%		
	自主トレーニングを行うことでもたらされるメリット	100%		
	リハ以外の時間も積極的に活動することが重要	90%		
	麻痺手使用の習慣化が機能回復を促す	100%		
周囲からの働きかけと環境設定がもたらす効果	モチベーションを向上させるための周囲からの働きかけ	60%	100%	
	生活の質を改善させる環境設定	90%		
回リハ生活の動機づけを高める感情や思考	他者に迷惑をかけないために必要な目標	30%	60%	100%
	本人が持つ強い気持ち	80%	100%	
機能や生活の向上に向けた専門家からのアドバイス		60%	90%	

\*数値は各回での同意率を表す。同意率が90%を達成した項目はその後の検討からは除いた。



図2 作成した映像の一場面

#### 4. 考察

本研究では肯定的結果予期の観点から回リハ患者の動機づけ向上のための映像の開発を行い、その内容的妥当性の検討を行った。その結果、高い妥当性を有する映像が作成された。以下にその妥当性、映像の有用性、映像の臨床応用等について考察する。

##### 4.1 妥当性について

本研究ではコンセンサスメソッドのデルファイ法を用いて、映像の妥当性の検証を行った。検証は合計3回行い、映像の内容とした13個の内容のうち、最終的に全ての内容で同意率90%以上を達成した。デルファイ法での同意率については70%~80%を同意とみなす研究が多く<sup>12-14)</sup>、80%で十分な同意率であるとみなされる場合が多い。本研究においては同意率の基準を90%としており、全ての内容で90%の

同意率を満たしたことは、本研究で作成した映像の妥当性を示す根拠になり得ると考える。また、本研究の対象者は平均して10年以上の回リハでの職務経験のある者となっている。実践経験豊富な対象者から高い同意率を得られたことについても本映像が妥当である根拠であると言える。

##### 4.2 映像の有用性

本映像は回リハにおける患者の肯定的結果予期の観点から動機づけを向上させる目的で作成した。患者教育における映像の有効性について、平川ら<sup>15)</sup>は、人工膝関節置換術を実施した患者に術後のリハの内容を示したビデオを視聴させ、痛みへの固執や5週後の術後痛が改善したことを報告し、その理由を未来の出来事が予測できることで不安感が減少したと結論づけている。また、平賀ら<sup>16)</sup>も同様に人工膝関

節術後患者にビデオとパンフレットを用いた患者指導を行った結果、疼痛の軽減や心理面での効果を報告している。このように患者教育における映像の活用は心理面に影響を及ぼすことも期待できるため、本映像も十分に心理的な効果は期待できると考える。また、理解度や満足度については口頭説明、パンフレットと口頭説明、ビデオと口頭説明の場合、ビデオと口頭説明で理解度、満足度が高くなることも報告されている<sup>17)</sup>。このため、本映像を使用する際は、療法士によるリハビリ時間に患者とともに視聴し、視聴中や視聴後にリハビリテーション療法士による説明を行うことが望ましいと考える。

#### 4.3 映像の臨床応用

以上で述べたように本映像は、肯定的結果予期の観点から回りハ患者の動機づけを向上させ得るものである。回りハでは訓練時間が増加することでリハの帰結が向上することが示されている。川原ら<sup>18)</sup>は6単位と9単位のリハを比較して、9単位のリハの方がFIM 利得やFIM 効率、自宅復帰率が高いことを報告している。また、池永ら<sup>19)</sup>も訓練時間の増加が在院日数や在宅復帰率を増加させることを示している。患者の訓練時間の増加や積極的な訓練参加を早期より促すためにも入院早期に本映像をリハビリテーション療法士とともに視聴し、患者に積極的なリハ参加の重要性について説明することは有用であると考えられる。また、映像で作成しているため診療時

間や診療報酬に左右されず、反復的な患者独自の学習を促すツールとしても使用できる。さらに本映像は療法士の経験年数にも依存せず画一的な内容を患者に伝えることができるため、特に経験年数の少ないセラピストには患者の動機づけを向上させるための足がかりのツールとして有効であると考えられる。

#### 4.4 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は一地域で職務についている療法士となっており、地域性の問題が取り除かれていないことが限界として挙げられる。また、対象者は10名となっており、同意率90%と高い設定をクリアしているものの、やや対象者が少ないことは否めない。

今後は本映像の効果について検証していく必要がある。縦断的な視点から本映像の視聴が回りハ患者の動機づけやリハの帰結にどのような影響を与えるのかを実証的に検討していく必要があると考える。

#### 5. 結語

本研究では、回りハにおける動機づけ向上のための映像を肯定的結果予期に着目して作成し、その内容的妥当性を検討した。その結果、高い妥当性を有した映像が開発された。本映像を用いることでセラピストの経験年数等に依存せず、画一的に患者の肯定的結果予期に働きかけ、リハに対する動機づけを向上させることが可能となった。

#### 倫理的配慮

本研究は川崎医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号19-050）。また、対象者には研究協力への同意を得た上でアンケートを配布した。

#### 謝 辞

本研究は川崎医療福祉大学の「令和元年度 医療福祉研究費」の助成を受けたものです。研究にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

#### 文 献

- 1) 回復期リハビリテーション病棟協会：回復期リハビリテーション病棟とは。  
<http://www.rehabili.jp/patient/#:~:text=%E5%9B%9E%E5%BE%A9%E6%9C%9F%E3%83%AA%E3%83%8F%E3%83%93%E3%83%AA%E3%83%86%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E7%97%85%E6%A3%9F%E3%81%AF,%E3%81%93%E3%81%AE%E7%97%85%E6%A3%9F%E3%81%A7%E3%81%AF%E3%80%81%E7%96%BE%E6%82%A3%E5%88%A5%E3%81%AB>. (2023.8.16確認)
- 2) 厚生労働省保険局医療課：令和2年度診療報酬改定の概要。  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12400000/000691039.pdf>, 2020. (2023.8.16確認)
- 3) 上淵寿：動機づけ研究の最前線。北大路書房、京都、2004.
- 4) Maclean N, Pound P, Wolfe C and Rudd A : The concept of patient motivation: A qualitative analysis of stroke professionals' attitudes. *Stroke*, 33, 444-448, 2002.
- 5) Chan DK, Lonsdale C, Ho PY, Yung PS and Chan KM : Patient motivation and adherence to postsurgery rehabilitation exercise recommendations: The influence of physiotherapist's autonomy-supportive behaviors. *Archives of Physical Medicine and Rehabilitation*, 90, 1977-1982, 2009.

- 6) 大寺亜由美, 竹内寛人, 浅井憲義, 福田倫也: 脳卒中後うつ状態を呈する重度四肢麻痺患者に対する作業療法—余暇活動としてのビデオゲーム実施の試み—. *作業療法*, 33, 164-171, 2014.
- 7) Bandura A: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215, 1977.
- 8) 小池康弘, 小野健一, 大岸太一: 回復期リハビリテーション病棟における患者の肯定結果予期に影響する要因の質的検討. *川崎医療福祉学会誌*, 31, 439-446.
- 9) 林玲奈, 青山弥生: ストーマセルフケアの指導プログラムの作成と評価. *日本看護学会誌*, 18, 142-149, 2023.
- 10) 烏山昌起, 河上淳一, 松尾福美: 肩関節周囲炎の夜間通に対するパンフレットを用いた就寝指導の効果. *日本運動器看護学会誌*, 16, 31-36, 2021.
- 11) 友利幸之介, 京極真, 竹林崇: 作業で創るエビデンス—作業療法士のための研究法の学びかた—. 医学書院, 東京, 2019.
- 12) Dip F, Boni L, Bouvet M, Carus T, Diana M, Falco J, Gurther GC, Ishizawa T, Kokudo N..., Rosenthal R: Consensus conference statement on the general use of near-infrared fluorescence imaging and indocyanine green guided surgery. *Annals of Surgery*, 275(4), 685-691, 2022.
- 13) 奥田淳, 遠藤淑美: 医療観察法の通院処遇対象者への訪問看護師の看護実践内容—デルファイ法による看護実践項目の検討—. *日本看護科学会誌*, 42, 401-411, 2022.
- 14) 野口京子, 落合亮太, 大橋伸英, 渡部節子: 訪問看護を利用する要介護高齢在宅療養者の認知機能や家族の負担感に配慮した口腔ケア方法の検討—デルファイ法を用いた調査—. *日本看護科学会誌*, 42, 186-195, 2022.
- 15) 平川善之, 原道也, 藤原明, 花田弘文, 問田純一, 平賀勇貴, 森岡周: ビデオを用いた患者教育による術後痛および破局的思考の改善効果. *Pain Research*, 30, 158-166, 2015.
- 16) 平賀勇貴, 久野真矢, 平川善之, 許山勝弘: 人工膝関節置換術後患者における患者教育を取り入れた作業療法実践が疼痛と心理的要因および活動量に与える影響. *作業療法*, 36, 491-498, 2017.
- 17) Snyder-Ramos SA, Seintsch H, Böttiger BW, Motsch J, Martin E and Bauer M: Patient satisfaction and information gain after the preanesthetic visit: A comparison of face-to-face interview, brochure, and video. *Anesthesia & Analgesia*, 100(6), 1753-1758, 2005.
- 18) 川原由紀奈, 園田茂, 奥山夕子, 登立奈美, 谷野元一, 渡邊誠, 坂本利恵, 寺西利生: 6単位から9単位への一日あたりの介入時間増加が脳卒中患者のFIM帰結に与える効果. *理学療法科学*, 26, 297-302, 2011.
- 19) 池永康規, 高橋友哉, 後藤伸介: 回復期リハビリテーション病棟における訓練時間増加の効果. *The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine*, 45, 744-749, 2008.

(2023年10月24日受理)

## Development of a Video to Improve Motivation in Convalescent Rehabilitation

Kenichi ONO, Yasuhiro KOIKE and Taichi OOGISHI

(Accepted Oct. 24, 2023)

**Key words** : motivation, video, convalescent rehabilitation

### Abstract

In convalescent rehabilitation, active participation of patients in rehabilitation is important, and motivation toward rehabilitation should be considered for this purpose. The purpose of this study was to develop and validate a video to improve motivation by focusing on patients' positive outcome expectations during convalescent rehabilitation. The subjects were 10 physical therapists, occupational therapists, and speech therapists with extensive work experience in convalescent rehabilitation. The Delphi method, a consensus method, was used to examine whether the storyboards contained content that would influence the expectation of positive outcomes. As a result of repeated examinations, the subject's consent was obtained for all of the hypothesized contents, and a video was created to improve the patient's motivation in convalescent rehabilitation. The video created in this study has high validity and can be used effectively and intuitively in rehabilitation situations. We believe that the use of this video will encourage patients to actively participate in rehabilitation and will have a positive impact on the outcome of rehabilitation.

Correspondence to : Kenichi ONO

Department of Occupational Therapy  
Faculty of Rehabilitation  
Kawasaki University of Medical Welfare  
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [k-ono@kawasaki-m.ac.jp](mailto:k-ono@kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.2, 2024 207–214)